
会いたい

ラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会いたい

【Nコード】

N9299Z

【作者名】

ラサ

【あらすじ】

三年前、私は事故で突然恋人を亡くした。最近になって、その恋人が残した空き家に幽霊がでるという噂を聞き、行ってみるものの、幽霊など現れない。

ある日、再び空き家へと行った私はとうとう幽霊と遭遇する。

しかし、そこにいたのは……

住宅街の少し外れの古びた空き家に幽霊がでると噂されたのは、夏も終わりに近い頃だった。

「売っちゃいなさい。あんな家、住みもしない、貸しもしないなんて無駄じゃないか。

放っておくから、変な噂が立つんだよ。売っちゃえば、土地だけでもたいしたお金にもなるそうじゃないか」

ことあるごとにそう言っていた母は、ここぞとばかりにまくしたてた。

「何度いえばわかるのよ。あれはまだ私のものじゃないの。名義上預かってるだけなんだから売るつもりはないの。絶対、ないの」

言い返す私は、いつものことなのでほとんど投げ遣りになってしまった。

「だいたい、そんなもの預かってたって、あんなさびれた家、使えないよ」

「どうでもいいでしょ、そんなこと。例え形だけとはいえ私が預かってるんだから、私の自由よ」

人の噂もなんとやらと言うが、幽霊の噂はかなり広まっていて沈下する様子もなく、結構な問題となっていた。初めは、私もどうこうするつもりはなかったのだ。そんなもの、はなから信じてはいな

いし、大体が何かの見間違い、もしくは勘違いと相場が決まっているのだ。

しかし、新しく入った情報が、私の重い腰を上げさせた。

『空き家にでる幽霊は、若い男である』

家主代理の私はさっそく一人で空き家に出かけ、日暮から夜明けまで、そこで幽霊を待った。けれど、ただの一度も幽霊は私の前には現れなかった。

正直、私はがっかりした。

別に幽霊が好きだったからでも、若い男が好きだったからでもない。

ここにでるのなら透^{とおる}の幽霊だと思ったからだ。

透は、私の恋人だった人。三年前、ひょっこり出かけたきり、戻らなかった。二十八にもなって定職にもつかず、根無草のように生きていく人だった。放浪癖があるのは分かり切っていたので、いきなり彼がいなくなっても、私は別段心配しなかった。

だが、二週間を過ぎて、私は透の車がこの町から遠く離れた海に面した崖下から発見されたという連絡を、彼の顧問弁護士だった人から受けた。

かけつけた私が見たものは、これ以上なくひしゃげた車と、運転席のシートについた黒ずんだ血の後だけだ。

死体は波にさらわれたのか、とうとう見つからなかった。

透は、まるで自分が死ぬことを予期していたかのように遺言を残していた。他に身寄りのない透はあの家の名義と管理を——と言っても、遺産の方は透の放浪資金のため半分以上はなくなり、あとは自動的に弁護士を通じて家の管理費に使われて結局のところびた一文私にお金が入るわけではなかったが——私に譲渡するようにと。

あの事故から三年が過ぎようとしていた。私は二十三になっていた。

私はもう大学生じゃない。就職難の為一般の職種の就職試験にこごとく落ち、教員免許を持っていたためにかろうじて地元の中学校の臨時講師として採用してもらい、社会人となっていた。透が決してならなかった普通の社会人に。

そうして、時間は流れていくのだ。

でも、私はまだどこかで透が生きているような気がしてた。いつか、なんでもなかったように私の前に、

「ただいま」

そう言って笑ってくれると、心の半分だけで、信じていた。

2

「お、お見合い　っ!？」

事件は、母の持ってきた一枚の写真から始まった。

「ちょっと、お母さん、どういふことよ!？」

久々に家に帰った日のことだった。母は私が大学に入る少し前に再婚したので、私は今勤務している中学校の近くにアパートを借りていたのだ。

「いやね、なんでも、あんたのこの前撮った写真を見た友達のお姉さんが、何を思ったか気に入ってねえ、息子もいい年頃だから、どうですか。せつかく言ってくださるんだから、会うだけでも」

私はテーブルをたたいて立ち上がる。

「断ってよ、そんなの!　卑怯だわ、私の断りもなく、勝手に話を進めて!　私、お見合いなんかしないからね。絶対しないわよ!！」

私は居間を出て、玄関へ向かった。

「ど、どこいくんだい？」

「決まってるわ。帰るのよ、自分のアパートへ!」

久しぶりに家に帰ったと思ったらこれだ。母はいつだって自分で何でも勝手に決めて、私には事後承諾なのだ。再婚のことだってそ

うだった。

もちろん、母だってひとりの人間だ。幸せになりたいと思うのは、当たり前のことだ。それを、娘だからといって私が邪魔できるわけもない。

でも、それと同じように私の幸せは私にしか決められない。誰にも、決められないのだ。

それが何故、この人にはわからないのだろう。

「もう、三年も経ったんだよ。忘れなさい、あの人のことは」

靴を履き終えた時、背後で、残酷な声がした。

私は振り返らなかった。

「死んでしまった人を、いつまでも思ってたって仕方ないんだよ。あんたは、生きてるんだから。これから先、独りで生きていくなんてことできっこないんだから」

さもわかりきったように言いきる母の傲慢さに腹が立った。

確かに、母はそうだろう。

でも私は違う。私は母ではないもの。全てを同じに考えるなんてできっこない。

それなのに何故、自分の考えだけが絶対のように、自分だけが正しいように、言い切れるのだろうか。

私でもないのに。私の気持ちなんて、全然わかろうとしないくせに。

「おまえの事を思って、言ってるんだよ」

嘘つき。

私のために、そう言う？

それなら、私の気持ちなんてどうでもいいの？

こんなにあなたの言葉で傷ついているのに、それでも私のためだ
というの！？

そう叫びたかった。

三年も。

あなたはそう言うけれど。

まだ三年よ。私がこれから生きていく長い人生の中で、まだ、た
った三年だ。

私のためを思って？

そう言えば、自分が正しいとでも思っているのだろうか？

免罪符のような言葉を掲げて、私の心を踏みつける。

そんな独り善がりな思いやりが、どれほど私を傷つけてきたか、
そんなこと思いもしないのだ。

いつだって、私のことなんて考えてはいなくせにこの人は優し
い母親のふりをする。

私を本当にわかってくれたのは、透だけだった。透しか、いな
かった。

透がいればよかった。

透だけでよかったのに、いつも私にはいない人ばかり残る。

「――」

私は黙っていた。

大声で心の中に芽生えたやりきれなさを叫びたかった。でも、で
きなかった。

叫ぶ前に泣いてしまう。泣き顔だけは、見せなくなかった。

私は黙って家を出た。

どこか、一人になれるところへ行かなければ。

けれど、この密集した住宅街ではそれは望めない。こうしてい
ても、どこかしらに人がいる。

私は唇を噛みしめ、ついでに自分の手の甲をつねりながら、北へと向かった。

住宅街を外れた空き家。

あそこへ行こう。

あそこなら、誰も滅多に入って来るまい。

あの噂が始めた時は、野次馬根性で来てた人はいるだろうけど、昼日中に幽霊を見にくる物好きはいないだろう。

あそこなら、きっと思いきり泣いても構わない。

透がいた、あの場所なら――

3

「きゃ————っ!!」

とうとう堪えきれずに泣きながら薄の生えた原っぱを通り抜ける頃、凄まじい金切り声が50mほど先の塀の中から聞こえてきた。

あの空き家だ!!

私はすぐに門へと急いだ。五、六人の制服を来た高校生の女の子たちが中から飛びだしてきた。

「どうしたの!？」

私はその子達にかけよった。泣いている子もいる。

「でででたのっ!! お、おばけよ!!」

一人が叫んだ。

「どこに!？」

やっとでたのだ!

「に、二階の奥!!」

それだけ言うと、彼女らは一目散に逃げていった。どうやら遊び半分で来たらしい。そこで本物を見つけて、予想外の出来事に慌てたというわけか。

でも、あんな関係もない子供の前に現れて、なぜ私の前には出てこないのだ。あの薄情者は！？

憤りを感じつつも、私は中へと入る。

土足のまま階段を上って、開いたままの奥の部屋へと駆け込んだ。この部屋は、透の部屋だったのだ。

「とおる！！」

確信を持って、私は叫んでいた。そして懐かしい姿を探した。だが、まっすぐに私の視界に飛び込んできたのは。

「――？」

透とはまったく違う、黒ずくめで長身の、本当に若い幽霊だったのだ――

一瞬私は別の、どこか知らない空間に入りこんだような気がした。

強い、何か引きつけるような視えない力があった。
そしてその中心に、彼はいた。

「――」

後ろの壁をかすかに透かして、私をじっと見ていた。

テレビで見るのと違って、その幽霊は透けてはいるけれど、ちゃんと全身があった。

優しそうな顔。

襟足の少しのびた髪。

見たこともない、知らない幽霊。

「ちがう……とおるじゃない……」

それまで歓喜に輝いていたと思われる私の顔は、幽霊が哀しげになるくらい急激に、落胆の表情に変わっていった。

「……」

私は、ひどくがっかりしていたので、この場の異常な現象を気にも止めなかった。

絶対に、透だと思ったのだ。

根拠のない分、思い込みは激しくて、私は本当に久しぶりにがっかりした気分を味わっていた。

しばらくその場に立ち尽くし、そうして、どれほどの時間が過ぎたのか。

不意に顔を上げると、幽霊はまだそこに立っていた。

長身で黒ずくめの幽霊はひどくすまなそうな表情になったまま佇んで、私を見つめている。

そして、ぺこんと頭を下げた。

「――」

それが何だかおかしくて、私は笑ってしまった。

幽霊の顔にも、安堵の表情が浮かぶ。

その時の私は、彼を幽霊だと頭では理解していたが、本当にはわかっていなかったような気がする。

「ごめんなさい。あなたのせいじゃないの。ただ、勝手にかんちがいしてただけ。気にしないでね」

私が笑うと、幽霊も笑った。

とても変な幽霊だ、ちっとも恐くない。

恐そうな顔もしていないし、体には血もついていない。

透けて後ろの壁が映っていないかったら、とても幽霊とは思えない。しかも私に頭を下げた。絶対に変わってる。

「あなた、どこから来たの？ どうしてここにいるの？ 昔、ここに住んでた人？」

私が言うと、幽霊は困ったような顔をした。

唇が何かを語って動いた。

けれど、私には聞こえなかった。

「何？ もっと大きな声で言っ。全然聞こえないわ」

もう一度、幽霊は言ったが、やっぱり私には聞こえなかった。

「私の声、聞こえてる？」

幽霊は首を傾げて私を見ていた。
聞こえないのだ。

私が幽霊の声を聞けないように、彼にも私の声は聞こえないらしい。

これでは会話になりはしない。

そして、はたと気づく。

もし私が透の幽霊に会えても、私達は言葉を交わすことすらできないのだ。

こんなに待って、その挙げ句に、こんな致命的な事実を知るなんて！！

なんだか、唐突に私は虚しくなった。そして、腹が立った。

「――かえる」

私は言い捨てて、その場を走り去った。

幽霊は追いかけてきたりはしなかった。

門も開け放して、私は走った。

そうして薄野原を通ると、また、哀しくなってきた。

「――」

その場にしゃがみこんで、私は息を整える。

どうしてだろう。この頃は、哀しいことばかり起きる。期待しすぎるから、いけないのだろうか。

私はただ、はっきりした答えがほしかったのだ。

中途半端な状態に、透が私をおいていってしまったから。

三年前の私は、こんな風になるなんて、思ってもいなかった。

透がいて、私の傍にいて、二人でいろんなことをして。

それがずっと続くものだと思っていた。

やがて私達は結婚して、子供が生まれて、二人で年を取って――
そんな風に、生きられると思っていた。

そう、信じていた。

「とおる……」

私は、こんな風に終わりたくはなかった。
終わりたくはなかったのだ――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9299z/>

会いたい

2011年12月29日01時47分発行